BLAECH 巻き込まれたもう一人の死神代行

クガッペ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＡＥＣＨ　巻き込まれたもう一人の死神代行

【Ｎコード】
Ｎ２０５１Ｍ

【作者名】
クガッペ

【あらすじ】
毎日同じような日々を過ごしていた空座第一高等学校所属の男子生徒白沢守、彼は別に霊感を持っているわけでもなく、勉強も運動も特に上手い訳ではなかった。ただ毎日がとにかくつまらなかった。夢も目標も、何の憧れも無かった彼にある日運命を揺るがす事件が起きた。

ごあいさつ

みなさん初めましてクガッペです。今回この小説が初めて投稿する物になります。長い間外国に滞在しているので、日本語が時々おかしくなります。後、僕は恐ろしく文才がありませんし、パソコンの使い方も分からない部分がたくさんあります。基本原作オールキャラとオリ主で話が進んでいきます。そういうのを気になさらない方々にお願いです、暖かい目で見守ってください。後、感想とかのところでアドバイスなんか頂けたら、非常にうれしいで。悪いところ、良いところはバンバン言ってください。

第一話　絶望の序曲

俺は白沢守、空座町にある空座第一高等学校一年。霊感があるわけでもなく、勉強や運動ができるわけでもなかった。ただ毎日がつまらなかった。おもしろいことが起きてほしいとも思ったことはない。具体的に俺は何がしたいのかは、分からなかった。毎日同じ席に座り、授業を受け、飯を食って、どこまでも続く空を眺めていた。

教室ではクラスメイトの浅野啓吾と小島水色が話ているのをよく見かける。浅野啓吾はクラスのムードメーカー的存在でいつもテンションが高く騒いでいる。小島水色は隣で騒いでいる浅野を適当に受け流して携帯電話をいじってる。

そんな中俺がおもしろそうだと思ったのが数人いる。黒崎一護と茶渡・・・名前忘れた。一護のおもしろそうなところはあのオレンジ色の髪、どうおもしろいのかは自分でも分からない。たまに茶渡と一緒に不良とケンカしている。たまたま俺と一護は帰り道が一緒だから話ぐらいはする。茶渡はとにかくでかい・・・体がね。必要以上にしゃべらないから何を考えているか分からない。

そういえばここ空座町は心霊現象が起きるから有名だったりそうじゃなかったりする。俺はあまりそういうのは興味が無いから気にしたことも無い。

今日も毎日のような日々が終わり、とっとと帰えることにした。一護は先に帰ったらしく俺はやけに眩しい夕日見ながら帰った。住宅街を歩いてたら一護がニット帽かぶった人と踏んづけていた。周りから「やべえ」とか「理不尽だ」とか聞こえるが俺には何の事か分からなかった。このまま帰ってもつまらないから。見物することにした。ニット帽の人、もうニットって呼ぼ。ニットの頭は一護に踏まれ地面にめり込んでる。哀れだ。

そう思ってる中止めを刺し（死んでないけど）話始めた。

「ギャーギャーうるせえ！てめえら全員あれを見ろ！」そう言って指を指した方向には誰かへのお供え物のような花が瓶に入れられ倒れていた。

「問い一、あれはいったいなんでしょうか？はい真ん中のおまえ。」急な質問に不良どもが体をビクっとさせた。

「あっ、あの～、この間ここで死んだガキへのお供え物・・・」

「大正解！」

当っていたのに顔を蹴りやがった。まあ確かに理不尽である。それからも一護の質問は続いた。俺の予想だと、そろそろ・・・あっ残りがブッ飛ばされた。

「てめえら、二度とこんなしてみろ。てめえらにも花と供えなきゃなんないようにしてやるぜ！？」

「ごめんなさい～」と逃げる姿はなんとも哀れだ。一護は死人へのお供え物が倒された事で怒っていたらしい。

「よお一護、また楽しくケンカか？」

「守か、どうしたんだ？」

「質問したのはこっちだろ？まあいいか、でまた死人が出ちまったのか？」

一護は「ああ」とだけ言い瓶をもとに戻し誰かと話しかけた。って、えっ？あなたもしかして幽霊見えんの？てかっしゃべれんの？俺は

やだよ幽霊見える友達とか。でもこういう優しいところがこいつの良いところだ。
それから一護と別れた帰った。

その夜、飯を食い終わった俺は散歩に出かけた。駅前近くのコンビニで時間をつぶした後、銀行へ向かった。向かっている途中誰かの気配を感じて振りかえってみても誰もいなかった。おいおい幽霊とコミュニケーション取れる友達の次は俺について来てるのかよ。あーやだやだ。そして照明が急にに消え、ビビって「電気屋さーん」と叫んでしまった。心の奥で電気屋さんに照明直してほしかったんだろう。
そして急に体が何かにつかまれた。下を見ると俺の体は宙に浮いていた。俺はその「何か」に恐怖した。さらに俺の体を握り潰し始めてきた。その力はどんどん強く、今まで体験したことのないくらい苦しかった。どうどうその「何か」の姿が見え始めてきた。テレビでもマンガでも見たことのない化け物が両手で俺を握り潰していた。化け物は俺に姿を見られたことに気づき一気に力を入れた。
俺には分かる。俺は・・・死んだ・・・。

第一話　絶望の序曲（後書き）

ハイ、読んでくれてありがとうございました。一話で主人公がいきなり死にました。みなさん「何か」は一体何なのかもうお分かりでしょう？アニメが原作を見ればすぐに分かります。それではまた会いましょう、さようなら。

第二話　絶望から希望へ

一護は昨日の夜から何か胸騒ぎがした。理由は彼自身も分からない、何か嫌な予感がした、これだけは確かだ。この胸騒ぎのせいで一晩中眠れなかった。

そして朝、朝食を取るために下の階へ降りるとテーブルの上に朝食が用意されていた。二人の妹の一人黒崎夏梨（くろさきかりん）が先に食べていた。

「・・・近くの住民によると、午前七時・・・」テレビからアナウンサーが事件の内容を話すが一護は聞く耳を持たない。

「おはよう、お兄ちゃん。」テレビを見ていた一護のもう一人の妹（く）黒崎遊子（ろさきゆず）の挨拶に対して一護も「おはよう」と言う。

「親父は？」一護は父である一心がいないことに気づき夏梨に聞いた。

「今日は何か仕事が多いって、今夜はいないよ。」

「そうか」と言いコップに用意された牛乳を飲んでいるととんでもない事が耳に入った。

「被害者は一人、白沢守君（１６）ビルが倒れて数分後に発見され病院に運ばれましたが、残念ながらなくなりました。」

一護はそれを聞いた途端コップを床に落としてしまった、コップは割れ、同じ事を耳にしてしまった妹二人も急な兄の友人の死に驚いていた。二人も守と面識があった、夏梨は何かと言おうとしたが絶句し、遊子は今にも泣きだしそうになっていた。一護も同じ様な反

応だった、自分の耳を疑ったが何度聞いても、何度テレビとみてもそれは事実だった。一護はカバンを手に取り、家と飛び出した。向かった先はニュースで話した病院。その時一護の走るスピードはいつも以上に早かった。

ＳＩＤＥ一護

（嘘だ、絶対嘘だ。あいつが、守が死ぬわけねえ。何かの間違えだ。）心の中で自分に言い聞かせ、生きていることを願い走った。

俺は病院に着いた途端受付のナースに守の居場所を聞いた。

「白沢守の病室はどこですか？俺はそいつの友人です！」

場所を教えられた俺は急いでそこへ向い走った、足音は病院内でも大きく聞こえた。しかし、今の俺に「病院ではお静かに」の看板が見てる暇はない。あいつの病室を勢いよく開けた俺は顔に白い布を掛けられたあいつが目に入った。俺は恐る恐る布を取った、やっぱり・・・あいつは、守は・・・死んだ。

ＳＩＤＥ守

俺はどうしたんだっけ、確か、えっと、ああそうだ、俺は死んだんだ。訳の分からない化け物にグシャリか・・・ククっ笑えねえ。ところでここはどこだ地獄が、それにしても明るいな。なら天国か？

「何をバカな事言ってんスか、ここは現世ですよ？」

隣から声がした、起き上ってみると下駄を履いて帽子を被っている怪しい人がいた。

「さっきから言ってること聞こえてますよ？怪しいとか下駄とか。」

やっべ聞こえてなの。言ってる事が口から漏れてなのね、はい。それはもういいとして隣のおさげに眼鏡かけてる大男誰ですか？ずっとこっち見てるんですけど。何だかやばそうな感じだから誤魔化しついでに質問しとこう。

「ここはどこ？」

「浦原商店っス。」

「それはなんの店？」

「駄菓子屋っス」

「あなたが店長？」

「そうっスよ」

「ここは何で荒野みたいになってるの？」

「ここは店の地下っス。

はい？地下ですか？広いね～なんて言ってる場合じゃない。俺は今パニクッてると思う、だから状況を整理しよう。俺は散歩してて、化け物に殺されて、気がついたら浦原商店と言う駄菓子屋の地下にいた。そしてこの下駄帽子がここの店主。よし、じゃあ1足す1は、2！よし大丈夫だ。

「俺死んだんですよね？化け物に殺されて、あれは何なんですか？なんで俺ここにいるんですか？貴方達は誰なんですか？」

「はいはい、質問は一つずつお願いしますよ。」

それから俺は一つ一つゆっくりこってりじっくり教えてもらった。その中で分かった物といえばプラスとホロウぐらいである、俺を殺したのはそのホロウらしい。なぜ俺を助けたかと言うと俺からかなりの霊力を感じたらしい、霊力って何？あと、俺は死んでプラスになっているらしい。そこで浦原さんから提案があった。

「なぜか分かりませんが、強い霊力のあるあなたは「死神」になる気はありませんか？」

第二話　絶望から希望へ（後書き）

読んでくれた方々ありがとうございます。内容がどんどんひどくなっていますけどがんばって書きます。正直自分でもちょっとつまんないです。他の人の小説をたくさんよんで参考にしたいと思います。

第三話　死神　前篇（前書き）

今回の話はオリ主の守がなんとなくで死神になる話の前篇です。

第三話　死神　前篇

死神はその身に死覇装という名の黒い着物を纏い、斬魄刀と呼ばれる刀を携帯している。現世に迷いし整（プラス）をソウルソサエティへ送り、現世を荒らす悪霊・虚（ホロウ）を現世から護り、現世とソウルソサエティの魂魄の量を均等に保つ役目の調整者である。

このように、死神、整（プラス）、虚（ホロウ）などを浦原に説明してもらった、守は死神になるための、レッスンを開始しようとしていた。始めに浦原が守から感じていた強い霊力は全く感じられなくなっていた。まるで霊力のない人間の魂魄のように。

「えー、それでは第一レッスンを開始したいと思います。雨（ウルル）。」浦原が浦原商店の一員である雨（ウルル）に何かを持ってこさせた。雨（ウルル）がもってきたのはハチマキらしき物とグローブ、それも二つずつ。雨（ウルル）はそれの片方ずつを魂魄の状態の守に渡した。「これを付けろと？」守の質問に対して雨（ウルル）は小さく頷いた。そして付ける間も無く浦原がスタートの合図の出した。雨（ウルル）は見かけから想像できないスピードで守に接近し振りおろすように殴りつけた。ケンカは得意ではないが、反射神経は良い守はすぐに体を一歩分ずらし避けた。

浦原は「ほう・・・」と関心したような様子を見せたがすぐに扇子を開き扇ぎ始めた。

ハチマキの付け方の分からなかった守は必死に逃げながらも、ハチマキをいろいろな方向から見ていた。そこへ浦原が叫んだ「白沢さん、おでこッスよ、おでこ。」それを聞いた守はハチマキを額に当て、こうですか？と聞き返した。そして浦原が「受けて見よ、正義の力、正義装甲ジャスティスハチマキ、装着！！」と叫んだ。つまり守に同じ事をやれということだ。仕方がなく、恥ずかしいのを我慢し同じ様に叫んだが、ハチマキからは何の反応もない。守は「浦原さーん」と浦原は少しの間固まっていた、「まさか」と守の口から言葉が漏れた。浦原はいつも通りのテンションで「故障ッスね」。

隣に立っていたジン太の口からは「死んだな、あいつ」が聞こえた。守はジャスティスハチマキが故障していることよりも、ジン太の口から出た言葉が気になった。もともと虚に殺され幽霊になっているのにまた死ぬのはおかしいと。もしそれが本当ならハチマキに頼っている暇はない、一か八か素手で雨（ウルル）に立ち向かうしかない。しかし雨（ウルル）のパンチは地面を砕くほどの威力がある。守は不安ながらも雨（ウルル）の方を向き構えた。雨（ウルル）のパンチを紙一重のところでかわし、右ストレートを打ち込んだ。（守はボクシングはできません。）見事頬に直撃したが、どうやら怒らせてしまい、顔面に飛び膝蹴りを受けてしまった。守は吹っ飛び大きな岩にぶつかり、岩は砕けた。

「店長、あいつたぶん死んだぜ。ハチマキ付けてなかったし。」ジン太は浦原を横目で見て言う。

「まあ、先に確かめてみましょう、テッサイ。」浦原はテッサイに確認に向かわせ、扇子を開き口元を隠す。テッサイは守の頬を平手で何度もひっぱたいた。そして両頬を真っ赤にした守が叫びながら飛び上がった。

「嘘だろ、あいつ生きてるぞ。」ジン太はかなり驚いていた。それも当然である。雨（ウルル）の攻撃を慣れない魂魄の姿でまともに受けたのである。

守が頬を頭をさすっていると、拍手する音が聞こえた。「白沢さん、おめでとさんス、第一レッスンクリアッス、しかし驚きましたよ。ハチマキを付けていない状態で攻撃を受けたから一時はどうるかと・・・」

「ならば、あいつを止めてくださいよ。本気で死ぬところだったんですよ！！！」話を終えてない浦原に怒鳴りつけた。

「まあまあ、落ち着いて、今はもう息苦しくないでしょう？」守は始め魂魄の状態では息苦しく、まともに走ることもできなかった。それから浦原が説明を始めた「霊力と言うのは魂魄の消滅の危機に最も上昇しやすいんです。あっ、ちなみにこの第一レッスンは言ってなかったですけど、霊力を手に入れるレッスンす。」

守はほとんどレッスンの説明を受けずに始めてしまったためはじめの方は手間取ってしまった。
「まあ、これで霊力は手に入れましたし、思った以上にずっといい出来なんで、このまま第二レッスンを始めましょう。」今度は説明をちゃんとしてもらうためさっそく内容を浦原に聞いた「次はどんなレッスンなんですか。」浦原は少し帽子の先を下げ「こんな感じッス」と言った途端テッサイが斧で守の胸につながれた鎖を切り離した。そして今、守はテッサイに背中を馬乗りされた状態になっている。
「因果の鎖は切られた部分から浸食します。胸の穴まで達したと時はホロウになります。」
「なっ、どう言うことだ、あなたは俺を死神にしてくてるんじゃなかったのかよ?」
「見ず知らずの人間を簡単に信じちゃいけませんよ、お母さんに習わなかったんですか?良いこと教えてあげます、死神になればホロウにならなくて済みます。それじゃ頑張ってください。GO!!」
浦原が守達のいる方向とは逆の方向に指を指し元気良く叫んだ、そして守のいる地面に穴が開き守は落ちて行った。

第三話　死神　前篇（後書き）

読んでくれてありがとうございました。守がやってるのは一護がやったやり方と全くいっしょですね。分からないかたはアニメ１８話を見てね。この調子で行くといつ破面の部分になるか分かりません、気の遠くなるはなしです。オリ主の斬魄刀の名前、能力なども決まってません、よろしければ感想のところに書いて頂けないでしょうか？お願いします。それでは、さようなら。

第四話　死神　後編

「レッスン2絶望の縦穴（シャタードシャフト）。」守が穴に落ちた衝撃で気を失っていたら、テッサイの声によって起きた。守が今いるのは数十メートルの暗い穴の中、同じく中には印を結んだまま座っていた。「白沢サーン、聞いてください。」穴の上の方から浦原喜助の声がした、守は声のした方向を見上げた。

「さっき、鎖が切れたら自己浸食が始まるってい言いましたよね、あれが完了する時間は切った部分から計算して４８時間、二日です。ちょっと厳しいかもしれませんがね、それまでに死神になれなかったら、ホロウになります。ホロウになったら・・・わかりますよね？。」

「あなた達が俺を始末しなければいけなくなる・・・」守は少々小さめの声で言った。守は当然ながら恐れていた、始末されるより、虚（ホロウ）になってしまう方がよっぽどトラウマになる。

「ならなくするにはどうすればいいんですか？」守はどうすればいいかは分かっていた。しかし、虚（ホロウ）になってしまうかどうかの状況に恐れ、誰かの声を、安心感が欲しかった。

「死神になればいいんですよ。なってそこから這い上がればいいんですよ。そしたらレッスン2クリアでス。」最後にこれだけの言葉を残し去って行った。守の位置からはもう浦原の姿が見えなかった。

「這い上がるったて、腕を背中の拘束されてるし・・・。」守が自分の背中を見て拘束器具を自力で取ろうとした時「足だけで登らなければ意味がないのです。」珍しきテッサイが守に話かけた。

「店長がおっしゃったでしょう、霊力は魂魄の消滅の危機に最も上昇すると、つまり今あなたは魂魄がホロウになってしまう危機に陥ってる。そこからどうするかはあなたしだいだ。」守はフッと鼻で笑い足でよじ登り始めた。勢いをつけ両壁を交互に蹴って半分のと

ころまで登ったところで急に胸に激痛が走った。守はいきなりの痛みに足を崩してしまい穴の底まで落下した。

空座第一高校ではチャイムがなり、一護のクラスでは担任の越智美論(おちみさと)が非常に残念そうな顔で入ってきた。クラスの数人も同じ顔だった。普段は騒がしい一護のクラスも今日は逆n馬鹿みたいに静かだった。先生が入っていてからしばらく沈黙が続く。そして最初に口を開いたのはやはり越智先生であった。「えー、今日は非常に残念なお知らせがあります。朝のニュースで見た人はもう知っているかもしれませんが・・・」ここまでしゃべり再び口を閉じてしまった。朝のニュースを見てない何も知らない生徒は「何があったんだ?」や「何か今日静かだよな?」などと小さな声で話ていた。クラス一うるさいあの浅野啓吾でさえだんまりだった。

越智先生はやはり言うしかないという顔でクラスを見渡しとうとう衝撃の事実を生徒達に話した「うちのクラスの白沢守が亡くなりました。このことを聞いた生徒の中に泣く者もいれば、「うそだろ」などと言う生徒もいた。しかし何より一護が落ち込んでいた。その場には今いないが守は一護にとって親友ではなかったが、少なくとも親友である茶渡の次に心を許せる相手であった。

一護は前日に病院で守の死のことを知った。そのためが周りの人間は彼に気をつかっていた。

現在一護は家で事故の後の片付けをしている。昨晩一護は死神である朽木ルキアに出会い、虚(ホロウ)にも遭遇した。今家に開いた穴はその時に壊され開いたもの。家はダメージを受けたが一護は死神の力を手

に入れた。しかし、朝起きればそのことはトラックの衝突によるものだけ家族に聞かされた。
ホロウのことはすべてなかったことになっていた。
一護は昨晩にであった死神ルキアのことを考えていた。「（あいつは何だったんだ、そうるそさえていっつうところに帰ったのか？それにみんな昨日のことを覚えてないのか？死神のアフターケアって奴か。）」
一護はある程度片付けを終えたところで遅れて学校に向かった。

同じころ死神になるためにレッスンを受けていた守の因果の鎖はすでに半分以上浸食されていた。残り２４時間で死神にならなくてはいけない。浸食する時は鎖の先から口が生え鎖を食い始める、その時に激痛が胸に走り動けなくなってしまう。
穴の外にいる浦原、ジン太、そして雨（ウルル）は卓袱台を置きお茶を楽しんでいた。「なあ、店長あいつ無理なんじゃね、言いなりただの魂魄から死神は。死神になったわけでもねえし。」せんべえを食べていたジン太はこの退屈な時間に飽き飽きしていた。浦原は「まあ、待ってみましょう。」と言うばかりだ。浦原には一つ疑問があった、確かに守は霊力を手にいてたが、上げたり、コントロールするのは不可能、しかし浸食している間霊力が大幅に上がっている、そのことは浦原やテッサイはもちろん、ジン太、雨（ウルル）もうすうす感じていた。問題は上がるのは浸食している時のみ。浦原は穴の近くまで行き守にアドバイスを出した「浸食する口は食べた後に寝ます、その時に登るよう試みてください。あともう一つあなた気づいてますか、浸食している時あなたの霊力が大幅に上がっていると、その霊力をどうするかが鍵ですよ。それじゃ、頑張ってください。」それを聞いた守は自分の霊力はどうなっているか感じようとしたが、頭をジン太に踏まれ集中が途切れた。守の顔は地面にめり込んだ、守は髪を

つかまれ顔を無理やり上げさせられた。守の髪をつかんだのはジン太だった「てめえ、この・・・」と守が怒鳴ろうとした時口に水の入ったペットボトルを押しつけられた。
「店長の命令だからな。」ペットボトルを持って顔をそらしているジン太がそう言うとすぐに穴から出て行った。外から守に話かけたのはまたもやジン太だった「ちなみに腹が減ったらホロウになる少し手前だからな。」
それを聞いた守はやっと分かった、魂魄なのにさっきからどうも腹が減っている。それからさらに数十時間やばいと思った瞬間鎖の先から大量の口が出てきて鎖がどんどん壊れていった。
守は思った、虚(ホロウ)には絶対になりたくない、絶対、絶対、いやだと。そしてその時に守が光出した。ジン太は驚いていた、まさか本当に守に死神の力が眠っていたことに。光からは黒い着物、死覇装が見え始めた。浦原はフッと鼻で笑ったが、すぐに険しい顔になった。すぐにジン太と雨(ウルル)を抱きかかえ絶望の縦穴(シャタードシャフト)から離れた。ジン太と雨(ウルル)はなぜ離れると聞いた、浦原は「爆発します・・・」ジン太達はつい「えっ？」と言ってしまった。そして浦原の言う通り穴から大きな衝撃が起こり穴の中から爆発が起こり周りが崩れて行った。崩れた後の穴の周りはまるでクレーターのようだった。その中心には死覇装を着て、やけに長い斬魄刀を持った守と、エプロンと眼鏡がボロボロになった、テッサイがいた。
守はとうとう死神になった。

第四話　死神　後編（後書き）

今回は少し長めでしたね。守がとうとう死神になりました。次の話に守はほとんど出ないと思います、それまでに守の始解の能力、名前を募集したいと思います。
僕は長い間海外でインターナショナルスクールに行ってるので日本語が本当に変です。まあ、どれはどうでもいいですけど。では始解は感想のところで書いてください。さようなら。

幕間　一護とルキア

俺は黒崎一護、高一、１５歳。身長は１７４ｃｍ、体重６１ｋｇ。
実家は町医者で家族は俺、親父、妹二人の四人家族。本当は五人家族だったんだが。
親父が医者をやっている、そんな親父はというと今日は仕事で家にいない。帰ったらいきなり自分の息子に蹴りを入れるようなろくでもねえ奴だ、いない方が平和だ。
俺の髪はオレンジいろ、これが原因で不良に絡まれたりするが別に気にしてねえ。
家が町医者だからか物心ついた時にはすでに霊が見えたりしていた。
今はもう視える、触れる、聴く、喋ることができる。

夜自分のベッドで寝転んで昼間女の子の霊を襲った化け物とそれを倒した黒い着物と刀を持った女が窓から入ってきた。それを見た俺は起き上った。

「何だてめえ。」
奴は質問に答えない。何かを探っているようだ。そしたら刀を掴んだ。俺はついビビッて後ろに下がった。
「てめえは誰だ。何のようだ？」
あいつは机から降りてきて一言。
「近いな」
いきなり入ってきて「近いな」だと、あまりに意味が分からないから俺はとりあえず蹴りを入れてみた。普通に触れるようだ。

それから俺はこいつから話を聞いた。分かったのはこいつは死神で、そうるそさえてぃと言う所から来た。あと飛んでもなく絵が下手ということだ。
ちょっとバカにしたら術みたいなのをかけられた。両手を背中に拘束され、うまく身動きが取れない。
なんだこいつは、本当に死神なのか？そもそも死神って何なんだよ？
そんなやりとりをしてるとリビングの方から大きな物音がした。
死神はすぐにドアを開けた。そこにはボロボロの遊子が倒れていた。
「お兄ちゃん、夏梨ちゃんを、助・・・け・・て。」
それだけ言って気絶してしまった。死神はすぐに下の階へ向かった。
俺も術が解けてないまま同じように一階のリビングへ向かった。
リビングで俺が目にしたものは夏梨が化け物に襲われていた。昼間死神が倒した化け物に似てる、俺が夏梨を助けなきゃ。
「やめる、貴様が勝てる相手ではない！」
死神はすぐに刀を鞘から抜き出し構えた。だが俺が行かんきゃ、夏梨がやられる、
「うううぅぅぅ・・・」
俺は腕にかけられた術を力ずくでも解こうとする。
「やめろ、人間のちからでは決して解けん。無理に解こうとすると貴様の魂が・・・」
俺は力を入れる。どうなったっていい、俺は妹を、夏梨を守らなきゃ。
「うおおおおおぅぅ、あああああ！」
俺にかけられている術が解けているのが分かる。俺はそのまま一気に解いた。溶けたらすかさずに折りたたみ椅子を持って化け物に突っ込んで行った。
俺は奴の腕で薙ぎ飛ばされ、行き止まりの方へ飛ばされた。死神が奴の腕斬り裂き夏梨を離した。俺はそれをスライディングで受け止

める。
化け物は闇の中に消えたが死神はまだ近くにいると行言った。死神の推測だと俺が狙われているらしい。

奴は不意打ちで俺を狙ってきた。俺は気づくのが遅れやられると思った瞬間、誰かが噛みつかれる音が聞こえた。死神が俺を庇ってやられちまった。
くそ、俺のせいで。
「死にたくなければ死神になれ。」
あいつが俺に言ってきた。あいつの刀、斬魄刀を俺の体の中心に突き立て死神が俺に死神の力を送ってきた。この時にお互いの名前を名乗った。
「黒崎一護」
朽木ルキア、それがこの死神の名前だ。
力を与えられた俺はあの化け物、ホロウを見事に倒した。
これは白沢守が死ね一日前の夜の話だった。

次の日、ホロウの襲撃はトラックがぶつかったせいになっていて、学校には昨日の奴ルキアがいた。
ほかのクラスメイト曰く転校生らしい。
こいつがいるということはまだまだ面倒くさそうなことが起こりそうだ。

幕間　一護とルキア（後書き）

今回は一護視点でした。これは第一話の後半ぐらいのところです。
話の順番が結構バラバラですけど暖かい目で見守ってください。
クガッペでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2051m/

BLAECH 巻き込まれたもう一人の死神代行

2010年10月11日14時16分発行